DE EX

銀河戦国群雄伝ライ

25

真鍋譲治

DE-5-25

発行
メディアワークス

9784840217699

ISBN4-8402-1769-6

C0979 ¥930E

1920979009301

発行●メディアワークス

定価：本体930円 ※消費税が別に加算されます

RAI

BY JOJI MANABE

25

銀河戦国群雄伝

ライ

●ARTIST
JOJI MANABE

●EDITOR
KATSUO ANDO

●BOOK DESIGN
TETSUYA ASAKURA

●SPECIAL THANKS TO
MASAHIKO YAMASHITA
TAKAAKI TOMITA
HIRONORI NAGAI

戦国の銀河を生き抜く群雄たち

【竜我雷】りゅうがらい

本編の主人公。天涯孤独、出自不明の少年であったが、その頃激しさを増していた銀河統一戦に一方の雄であった五丈国国王、比企弾正の許でその兵歴の第一歩を示す。その度胸と悪運の強さを時の上官、女将軍狼刃に買われて一兵卒より突如師団長に抜擢、五丈軍先鋒として南天に雪崩れ込む。南天軍の前線を突破するや、大暴れして要衝、座王都に一番乗りを果たし、その勇名は敵味方に響き渡る。その後も、数々の戦功により、昇進に昇進を重ね、弾正の死後、骸羅のクーデター時には、南京楼の太守に収まっていた。初めて地盤を得た雷は、その地で希代の天才、師真を軍師として迎え、また、皇室の娘、紫紋を妻に娶ると、すぐさま中央に反旗を翻し、挙兵する。圧倒的に不利な状況の中、死闘を展開、ついに金州海にて恩師、狼刃を涙をふるって倒した。その余勢を駆って、偽帝、骸羅をも打ち倒し、全五丈を平らげる。その後、玄徳、西羌王ら反竜我派の反乱を鎮圧する中、五丈主に即位し、尊号を竜王と称する。西羌と和を結び、着々と国内体制を固める雷に対し智の正宗とそれに呼応するかの如く、北伐を決意した南天王、羅候率いる南天軍がほぼ同時に大挙して五丈領内に侵入、国力が整わない五丈は最大の危機を迎える。雷は軍師、師真の戦力集中による各個撃破の策を取り、まずは開彭沖にて正宗と激突、最後には単艦同士での一騎打ちにより、ついに宿敵正宗を倒した。雷は返す刀で、南天軍主力を六紋海におびき寄せ、天文を利用した戦法で壊滅的な打撃を与える。歴史の分岐点となったこの戦いで雷の覇者への道が確定した。また、家庭的にも、第二夫人である弾正の娘、麗羅との間に跡継ぎ、梵天丸(後の二代皇帝文帝)を授かり、順風満帆の中、ついに弾正公を始めとする歴代の北天の覇者が誰も成し得なかった南征に挑む。迎え撃つ羅候率いる南天軍を北京沖で激戦の末、撃破。その勢いを駆って、南天首都、大王理をも占領した。だがその勝利の美酒を味わう間もなく、寝返った西羌軍に、斉王都を落とされるという事態が発生、最愛の妻、紫紋、そして宿将盧閣を失うことになる。

【大覚屋師真】だいがくやししん

南京楼の豪商、大覚屋の放蕩息子。若干は酒色に溺れて甚だ評判が悪い。だがその知謀たるや史書、経書から兵法、天文、医学に精通した天才的な戦略家である。並みいる諸侯からの度重なる招きをすべて固辞し、時を待つが紫紋を横恋慕したことによる縁で雷に出会い、以来その才覚を余すことなく発揮、雷の覇業の最大の立役者である。六紋海の戦いでは雄大な戦略を立て、敵軍師、姜子昌との決戦に挑み、これを撃ち破る。雷とは君臣の間柄を越えた仲である。

【麗羅】れいら

雷の主君であった比紀弾正の娘。勝ち気な性格で、雷との絡みでよく紫紋とは対立し、反乱の罪を被せて紫紋を殺そうとしたこともあった。弾正の死後、国政を乗っ取るが骸羅に国を追われ、雷の許に転がり込み、第二夫人として、雷の第一子でもある梵天丸をもうける。一時険悪でもあった紫紋とも和解し、子育てに励んでいる。

【雲海入道】うんかいにゅうどう

雷の兵卒時代からの戦友。かつては高僧にも仕える身分であったが、大酒飲みが仇で宗門を追われた破戒坊主。だが、雷にとっては最も頼りになる豪傑である。終始、雷とは戦場を共にし、また、雷の密命を帯び、暴政下の武王都より麗羅を救出、無事雷の許に送り届けた。六紋海の決戦においては一軍を率いて奮戦し、雷を守る。

【三楽斎】さんらくさい

五丈の尚書令。師真に次ぐ、実質、五丈家臣団ナンバー2である。極めて有能な能吏派軍人であり、弁舌の才を持って雷を補佐し、外交、内政面においてその優れた才能を、遺憾無く発揮する。

【鐘士元】しょうしげん

五丈軍の勇将。雷の師団長以来の宿将で、その勇猛果敢さで、常に先鋒を受け持ったが、師真のような新参者とは反りが合わず、対立した。だが次第にその知謀を認め、その指揮下に入り活躍する。

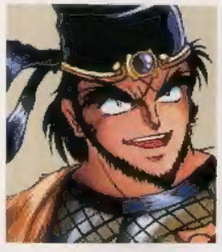
【姚文】ようぶん

五丈軍の勇将。鐘士元らと共に雷の股肱の臣である。師真とは合わなかったが、その命には良く服し、戦功を重ね、雷の覇業の一翼をなす。

勇一辺倒ではない男でもある。

【項武】こうぶ

雷の旗揚げ時からの宿将であった項焉の息子で八十斤はあろう大斧を片手で軽く振り回す豪傑である。その武勇を買われ常に先鋒を任される。六紋海では、星海に散った項焉の仇を討つべく奮戦する。



【林則嘉】りんそくか

五丈軍の謀臣。若い頃は風采も上がらず誰にも相手にされなかったが、南京楼城内に出入りしている間に師真に見出され、雷輔翼の人物として師真と双璧をなすようになる。天才肌の師真に対して、地味ながら、その誠実さをもって数々の献策をし、雷の覇業を助ける。特に金州海の戦いに於いて、焦る雷を勇気を持って諫めたことは、その後の雷の成長を考えると特筆に値する。

【如晦】じょかい

東河の七賢人と呼ばれた処士の一人。田舎に於いて晴耕雨読の生活を送っていたが、五丈を平定した雷により、三顧の礼を持って迎えられ、幕下に入る。

【孟起】もうき

大将軍、孟閣の息子で五丈軍第二世代を代表する青年武将。六紋海での戦いでは、遊軍を率い活躍、斉王都の危機においては自ら志願し雷に帯同する。

【装伯】そうはく

造船総監装民の甥。五丈軍の技術者の要の一人であり、装民の作った巨砲を自走砲艦として生まれ変わらせた。

【呂朱】りょしゅ

五丈軍の中堅武将。雷の挙兵に応じ、骸羅派の大守を殺して雷の許に馳せ参じた功により、奮威将軍に進んだ。

【鎮才】しょうさい

郡役所の下級官吏から鎮南将軍にまで登り詰めた苦労人。六紋海の戦いでは、後方遮断の任を任される。

【楊尚香】ようしょうか

独裁者特有の孤独を感じ始めた雷の心の渇きを潤してくれる寵姫。元々は商家の娘であり、才識に優れ、その性格は明朗闊達である。雷の寵愛を一身に浴び、後宮で侮れない勢力となる。

【大覚屋英真】だいがくやえいしん

師真の弟で豪商大覚屋を擁しての南京楼産業界の若きリーダーである。その立場から雷の良き経済アドバイザーとして活躍、骸羅摂政後の五丈経済再建に大きく貢献するが、長引く戦乱に民が疲弊しきっていることを悟り、早期講和の道を模索し始める。

【羅候】らこう

南天王。父、羅鶴の死後、兵権を引き継ぐ。当初は南天の大国、智に従属していたが徐々にその勢力を広げ、南蛮国王女、邑峻を娶り、その地盤を強固なものにする。正宗の北伐時には隙を突き、南帝闇を占拠、虎丸を智王に立て正宗を失脚させる。南蛮王の死去後、その王位も継ぎ、練、南蛮二国の盟主となり南天に揺るぎない地位を築く。その後、正宗が復権すると見るや、素早く智領土の併合を謀り、正宗と智王を遥か領土外に追いやる。次いで、天下統一を目指し、大軍団で五丈に侵攻するが六紋海で完敗する。五丈軍の南征に対しては姜子昌、龍緒らと意見が合わず、両名を罷免、自ら討って出るも大敗を喫する。

【龍緒】りゅうしょ

夏候猷と共に、琥瑛罵洲、羅候の二君に仕えた老臣。実質的には練の宰相職にあり、法令、兵法、いずれにも造詣が深く、北伐にも帯同はしているものの、数多い将官の中にあっては、慎重派である。

【邑峻】ゆうしゅん

南蛮王琥瑛罵洲の一人娘。羅候とは許婚の仲である。南蛮王国との連携を強めるために、羅候の許に輿入れ、百人もの女兵士を従えるなど相当なじゃじゃ馬ではあるが、意外にも花嫁修業には熱心だった。とにかく羅候が好きで好きでたまらないという感じで、それ故に城内を餃子だらけにしてしまうなどいろんな騒動を起こす。羅候の本格的な北伐にも同行し、身重な身体でありながら、大鉈を振り回しての大奮闘した。

【金角・銀角】きんかく・ぎんかく

南天軍の兄弟武将。姜子昌の配下で六紋海の戦いで辛うじて生き残る。その後智への侵攻に失敗。その彼らの許に五丈の使者が…。

【神楽】かぐら

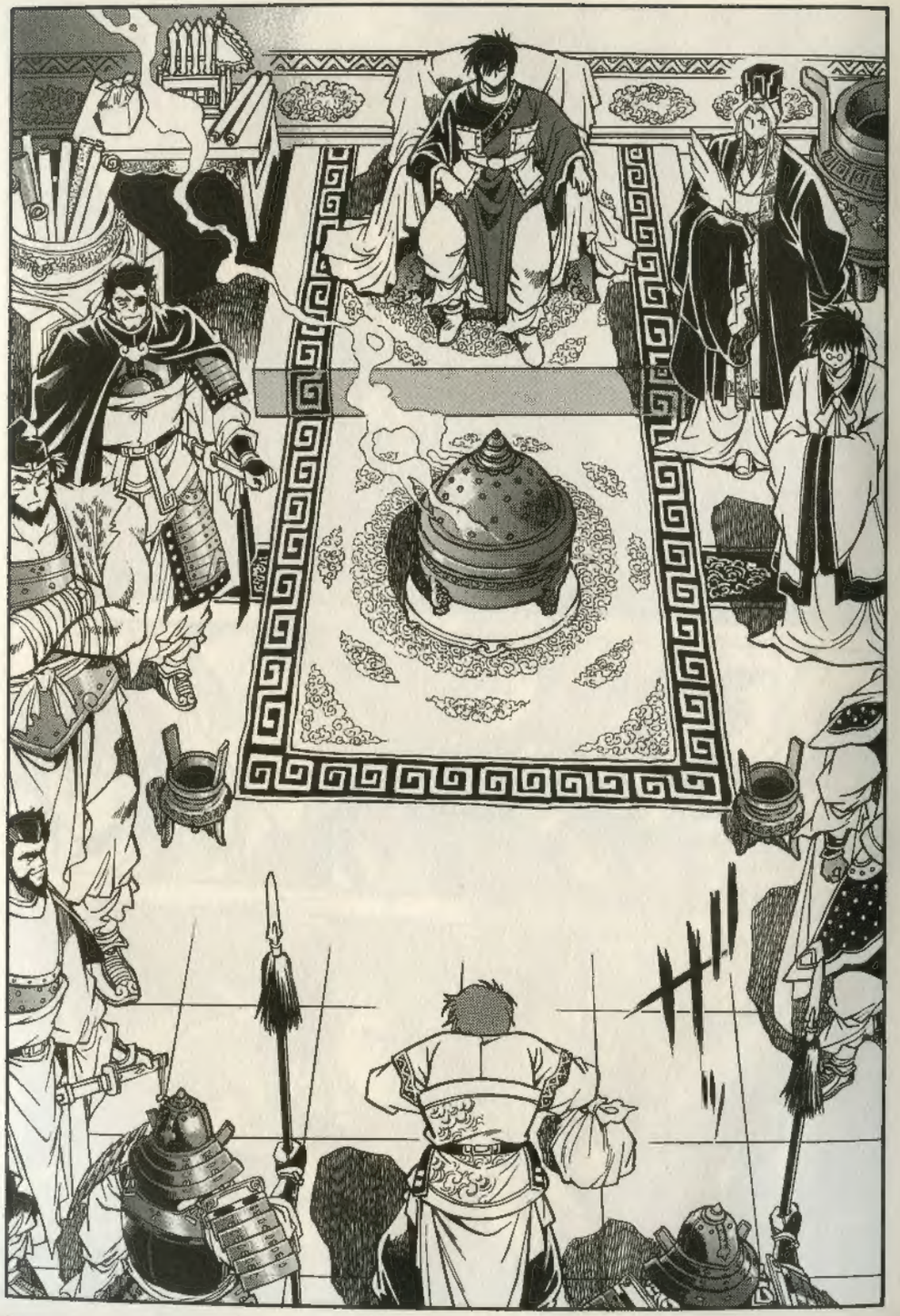
南天国の女武将。白象戦車隊を駆り八十斤の鎖鉄槌を振り回す猛者である。姜子昌にはのかな恋心を抱くが、六紋海の戦いで、善戦空しく、一度は破った項武に捕らえられ、そのまま彼の妻になる。それでも姜子昌への未練が断ち難く、彼への想いを遂げようと、餃子作りに精を出す。

【飛竜】ひりゅう

正宗の側近。姜子昌と共に兵学を学んだ仲ではあるが、互いに違う主君に仕えることによって、敵味方に分かれてしまう。正宗から絶大な信頼を受け、その死後、文字通り粉骨砕身、智国復興に励むが、五丈の進駐を阻めず。母国の滅亡を前に南天に亡命、姜子昌の許に身を寄せる。

【華玉】かぎょく

玄偉の腹心。李張導師の高弟で、その秘められた力で玄偉の暗躍を助ける。偽帝討伐時には師真と功を争うが、寸でのところで破れる。



その後も刺客の梨扇を使い、雷暗殺を謀るが失敗。玄偉の滅亡と共に雷に降り、幕閣に迎えられる。

【李張】りちょう

弾正の元軍師。その弟子には華王、骸延など知謀の士が多い。銀河の覇者の出現を予見している。

【簡々】らんらん

華玉の妹。共に李張に学ぶ。道師としてその能力は未知数だが、紫紋の良き友でもある。玉の輿を狙ったりするなど、なかなかのしたたか者である。

【紫紋】しもん

敗将阿曹主禅と皇女を両親に持つ娘。皇室の血を引くことで様々な辛い運命に翻弄される悲劇の娘である。父親を雷に殺された後、五丈に身柄を引き渡され、恩賞として仇でもある雷の許に預けられた。だが、雷とはそれを乗り越えて深い愛情を寄せ合うことになる。正妻となってからは、戦場に赴く雷を陰日向と支えていく。雷に対して政治的な口出しをすることはないが、女を政治の駆け引きに使うやり方には、思わず雷に苦言を呈した。五丈と南天の抗争中に秦宮括の寝返りで斉王都で命を落とす。

【蹄虎】ていほう

南天軍の若き武将で姜子昌の片腕として活躍する一方、雷の許にお忍びで潜入する羅候のお目付役と、苦労も絶えない。優れた容姿と立て板に水の弁舌で、外交的謀略にも暗躍。西姜軍を動かし、五丈の首都を襲わせることにも成功する。姜子昌の最後の秘策「月落とし」にも従い、戦死する。

【秦宮括】しんていかつ

銀河の外周に位置する西羌国の統治者。雷の人間の大きさに感じ入った彼は雷との共存を謀るが…。

【姜子昌】きょうししょう

南天きっての名将。羅候の竹馬の友でもある。若くして、当時の練軍の大都督に就き、羅候を補佐し、練国を南天一の強国に押し上げる。又、ライバルでもある正宗による銀河統一を阻止するべく画策、正宗を失脚に追い込む。羅候の北伐においては南天軍三千万の総大将に就任、五丈軍をもう一歩の所まで追い込むが、師真の策により敗退する。その後の北京沖会戦には、地位を剝奪され不参加。秘策「月落とし」に失敗した今、命を賭して、雷暗殺を目論む。

久しぶりだな
飛竜…！
はい…
智の国を出て
恐らく南天に
いるとは思っていたが
どうしていた？

はっ
思うところが
ありまして…
各地を
旅しておりました

それで
偶然出会った
姜子昌の
首をはねたと
いうのか？
……
まあいい
詳細は
聞かぬ
欲しいのは
首だ
それさえあれば
問題はない

飛竜よ…
その天下とは…
だれの天下だ？

では
御見分を…
待たれい
飛竜殿
そなた
何を望むのか？
そなたほどの
武将
金や地位
目当てでは
なかろう
ましてや
我が陣営に
取り立てて
もらうなど
考えておるまい
天下のために
ございます！
ん？
天下だと
姜子昌という
男の首！
天下のために
必要と思った
所存でございます

それは
銀河の覇者
たる方…
すなわち
竜王陛下にて
ございます!!
オオ
俺の天下のために
姜子昌の首を
持参したと
いうのか
御意
それは良き
心掛けだ
礼を
申すぞ
ははっ
ありがたき
幸せ!

それでは
その首…
見せて
もらおうか
はっ

……
これが…
南天大将軍
姜子昌の
首か…

金角・銀角
両将軍を
呼べ！
はっ！
お呼びで
ございましょうか
陛下！
この首を
見よ
!!
う…
姜子昌の
首に
相違ないな！
はい
たしかに…！
姜子昌将軍の
首に相違
ありませぬ…！

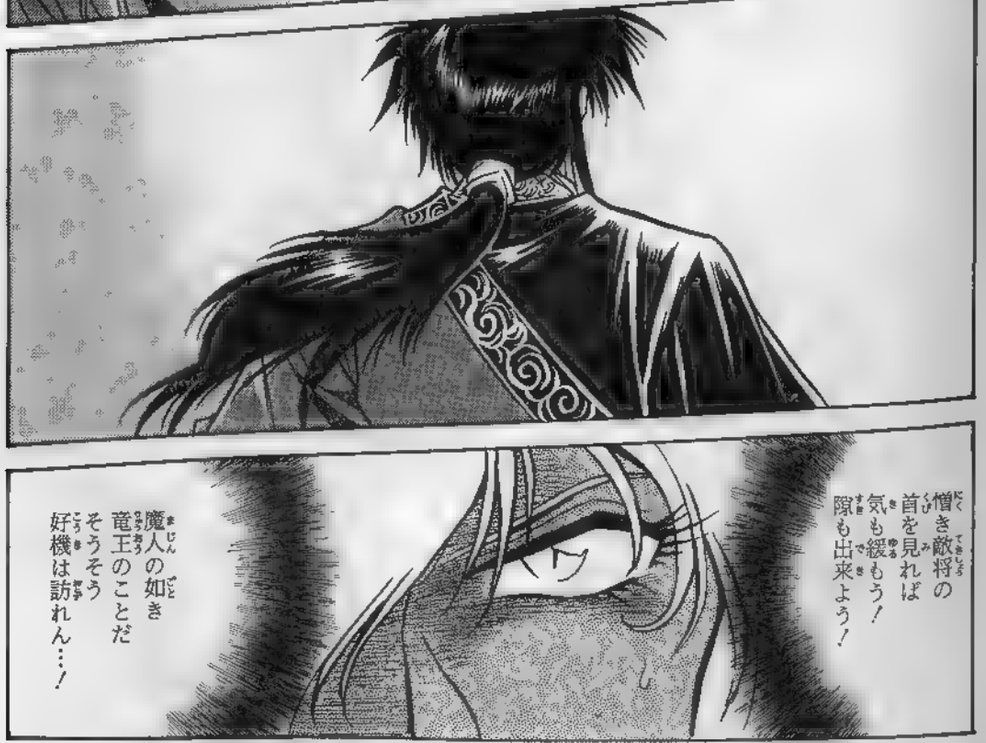
ふふふ
ふあっははは
ははははっ
陛下
いかがなされました？
姜子昌は
正宗を
失脚に追い込み
西光を動かし
また
月を落として
俺を潰そうとした
油断ならぬ男よ
生かしておけば
これから先
我々にいかなる
災いをもたらすやも
しれぬ男が
よりによって
女に寝首を
掻かれ
俺の前に骸を
さらすとは…
おう林よ
これが
笑わずにいられるか

戦場で
討ち取ることが
これほど
むずかしい男の首が
こうも容易く
手に入ったのだ
思わず
笑いも出よう
南天に人ありと
いえば
姜子昌のみ！
もはや
これで趨倹は
両腕をもがれたのと
同じじゃ
つまんねえ
小細工をしやがる
からだ！
わっはははは!!

飛竜よ
はっ
姜子昌を
討ち取ったことは
千万の敵を破るに
等しい大手柄だ
褒美を取らせる
何なりと申せ！
いえ…
何も望みません
ほう
そうなのか？

なれば
しばらく
ここに逗留
するがいい
正宗公の
思い出でも
語り合おう
首は
いかが
いたしますか？
塩漬けにして
南天全土に
回覧させる！
五丈の勝利を
南天部族に
思い知らせる
決定的な物証
だからな

皆も
退がっていいぞ
ハハハ
ギロ ギロ


憎き敵将の
首を見れば
気も緩もう！
隙も出来よう！
魔人の如き
竜王のことだ
そうそう
好機は訪れん…！

間合いを計って
一撃で倒すのだぞ！

手応(てごた)え…
あった…!!!

この俺を殺せると思ったのか!?
こんなちっぽけな短剣で…
何のつもりだ…
うん?
俺の身体には無数の傷がある
おまえの主人正宗の弾丸も深々と食い込んだ…!
俺に取ってはすべて武功の証だ!
今度はおまえか?
飛竜よ!!

あうっ!!
ふふ…
!?
た…短剣だと
思って
甘く見ないことだな…

それには
たっぷりと
毒が塗って
あるわ!
何いっ!?
天下の覇者
竜王は
臓物腐らせて
死ぬのよ!!
相応しい
最期じゃない!!
ささまくくっ!!
待て!

これで満足か？
ええ…
きさまを殺せてね…!!
俺が死ななければどうする？
そんなはずはない…!!
すぐに身体中に毒が回る…！激痛にのたうちまわって死ぬわ！
きさまだって不死身ではあるまい…!!
飛竜よおまえは天下人正宗の側に仕えて何も学ばなかったようだな！
な…何いっ!!
天命を受けた人間はこの程度のことでは死なん！
例え他の人間が死ぬことがあっても俺を殺すことはできん!!
かまうな！
きさま——っ!!いわせておけばぐぐっ!!
暴君竜王は天下統一を目の前にしてここで死ぬのよ！
ははは…
はははははっ!!

ば…
ばかな…!!
そんなことが
あ…あるか!!
それを
俺は証明する!!

り…竜王様
傷の手当てを…!
案ずるな
大したことはない
今まで
戦場で受けた
傷に比べれば…!
り…
竜王様!!
陛下…!!

医者だーっ!!
早く!!!
竜王様!
お気をたしかに!!
おまえの
差し金だな…
そうだな?
姜子昌…!
師真…

陛下！
しゃべっては
なりません!!
いいから
聞けいっ！
このことは
絶対に外に
漏らすな…！
かまわず
進撃を
続けるんだ…！
しばらくの間
全権を任せる…！
俺は女とでも
遊んでいることに
しておけ…!!
雷…！

おおっ
いけませぬ
熱が
高う
ございます!!
急ぎ止血をし
安静に
いたしませぬと…!!
雷!!
安心しろ…！
俺は死なん…!!
俺が
嘘いったことが
あるか…!?

武王都
ええか！

俺は…
竜王様——っ!!
雷!!
雷!!

※22巻の描き下ろし漫画を参照

奥方様の分も甘えてきちゃいまーす♡
ええから早よ行けいっ!!

はあ…せやけど…
トソトソ
雷のやつ何考えとんのや…
そら女連れがあかんとはいわへんけど…
楽士を含めて一千人は多すぎるやろ
都がすっからかんになるやんか
おまけにうちには留守を守るようにというのはどーいうことや!
うちかて雷に会いたいんや!

恐れながら…奥方様は梵天丸様の御生母でございますぞ
戦場に赴くなど下下の女にお任せあれ
わかっとるわい!

晏石!
は…はい!
冠がゆがんどる!
あ…こ…これは…申し訳ありません…!
え?逆?

そちは副官やろ三楽斎はどないしてんねん?
まだ寝込んどるんかい?
はあ…
よほど心労が大きかったようで…
頭を上げることもままなりませぬ…
紫紋様 孟閣様 お二人が亡くなったのに自分だけが生き存えているのが申しわけないと…
さようか…困ったの

この戦乱の時代…
ぎょーさん
死んでしもうた…
王福来も…
項嵩も…
皆 妻も子も
紫紋も…
孟閻も…
あろうに…
死んだ者は
哀れやけど…
生き残った者は
なお辛い…
三楽斎の
気持ち…
うちにも
よう判る…
お冒棄
一々ごもっとも…
されど今
竜王様は
戦を無くすための
戦をなさっております
勝利の暁に
諸侯が襟を正して
これに従い
万民のために働けば…
天下太平の御世も
夢ではございますまい
そうやなぁ…
そうであって欲しい…
そうでなければ
あかん…
こんなに辛い想い…
この子らの世代に
残すわけには
いかんやろ
そんなことは
させへんで
かく申す
我ら臣下一同
陛下の志をしかと
肝に命じ
人のため…
天下万民のために
身命を投げうつ
所存でございます!
何卒
御厚情をもって
御見届けのほどを
願いあげ奉ります
うん…
その心掛けあってこそ
死んだ者の
霊も浮かばれるわ

比紀弾正の娘
麗羅
紫紋亡き後
正夫人に昇格
やがて
二世皇帝梵天丸の
生母として
絶大な力を振う
こととなる
梵天丸
こっちに来いや
後継者問題で
その血も涙もない
手腕のために
悪女列伝にも
名を連ねることとなる
彼女ではあるが
竜我王朝の世襲を
確実にした功により
玉皇太母の名を送られ
七十七歳で
天寿を全うした
一方南天領内を
進撃する五丈軍は
大王理より二百里ほどの
陪都・白虎嶺に
本陣を設けた
もちろん
重体である雷の
治療に専念するのが
目的である
だが侍医達の
懸命の治療も
むなしく
雷の容態は悪化の
一途をたどっていた

どうだ？
はは…
手を尽くしては
いるのですが…
まさか助からぬと
いうのでは
ないだろうな!?
全身に毒が回り…
臓腑を腐らして
おりまして…
薬も
受け付けませぬ…
ば…
ばかな…！
ここまで
来て…！
丞相
今一つ陛下の
御命をお助けする
手がございます
何？
名医と
名高い
智の扶華を
召し出されませ！

扶華？
聞いたことの
ある名だ…
思い出した！
智王の近臣でもあった
侍医だな！
左様で
ございます
その男なら
治せると
申すのか！
はい
以前彼の記した
医書を読んだ
ことがございます
腹中を腐らせ
手の施しようがない
患者の腹を開き
病巣を切り除き
臓腑を薬で洗い
治療するとのこと
その後
元のように
腹に収め
傷口を縫うそうに
ございまする
その医書なら
読んだことがある
しかし本当に
そんな荒療治で
治るのか!?
多くの者が
この治療により
命を救われて
おります
丞相！
扶華以外
陛下の御命
救えませぬぞ！

師真様！
軍師!!
キィ…
いかがでございますか!?
陛下の御容態は!?
皆よく聞け！
智にいる扶華という医者を召し出すこととなった
彼なら陛下をお救いできるとの侍医達の話だ
士元！
はっ！
先鋒部隊の進撃は緩めるが大規模な演習を執り行い南天軍を牽制せよ！
ははっかしこまりました

林！
まもなくこちらの要請で五丈より美女・美酒・楽士などが届くだろう
これらを使い連日酒宴を開き訪ねてくる南天諸部族を歓待してやれ
陛下の女遊びですね
それからもう一つ
陛下の容態は徐々に流せ
さすれば南天側もその推移を見定めるまで逆に動けまい下手に隠し立てして勘繰られるよりましだ！
はい！
軍師！俺にその医者を連れて来させてくれ！
いや扶華という男…元智王の近臣でもあったのだ
その男に智王を自害に追い込んだ竜王様の治療を頼むのだ簡単なことではない

それ故
私自ら出向き
何としてでも
治療するよう
説き伏せて参る！
そんな
面倒臭いことを
しねえで
ふん縛って
連れて来れば
いいじゃねえですか！
項武！
陛下の御命は
この扶華の
返事一つに
かかっているんだぞ！
なぁに
いうこと
聞かねえようなら
俺が身体に
わからしてやらあ！
軽率な行動は
陛下の御命を
縮めることに
なることが
わからんのか!!
そうですよ
将軍
ここは師真様に
お任せしましょう
うぅぅ
わかりやしたよ…
けど俺も一緒に
行かせてくだせえよ
ここで何もせずに
待つなんて
我慢できねえ！
……
絶対に
口も手も出さぬと
誓えるな！
もちろん!!

う…
ううう…
霞…
辛いだろうが
がんばってくれ…！
必ず扶華を
連れて来る…！
だから…
だから
俺達の夢を
こんなところで
終わらせるなよ…！

その智王侍医の
扶華は智の旧都
南帝閣にいた
一介の町医者が
智王朝の崩壊の動乱の中
正宗・虎丸の近臣として
仕えた扶華の
選んだ道であった
うん
大分
良くなったのう
身体は冷やさんように…
飯は八分粥での
はい
ありがとう
ございます
先生
先生
お客人で
ございます

はて？
客じゃと
どなたかな？
さあ…
何でも
軍師やら
丞相やら申して
おりますが…
お待たせ
いたした
町医者風情に…
面をお上げ
下され
扶華殿で
ございますな

それがし
五丈国丞相
大覚屋師真で
ござる！
本日は
天下の名医
扶華殿に
お願いの義があり
お訪ね申した
無礼の断
平に御容赦を！

五丈の丞相が
わしに何の用じゃ？
診察なら
表から参り
なされ
やいやい！
丞相が頭
下げてるのに
その態度は
何だ!!

口を出すなと
誓ったはずだぞ！
う…っ！
先生に診ていただき
たいのは
それがしでは
ござらぬ
患者は
それがしの主君
竜王でござる！

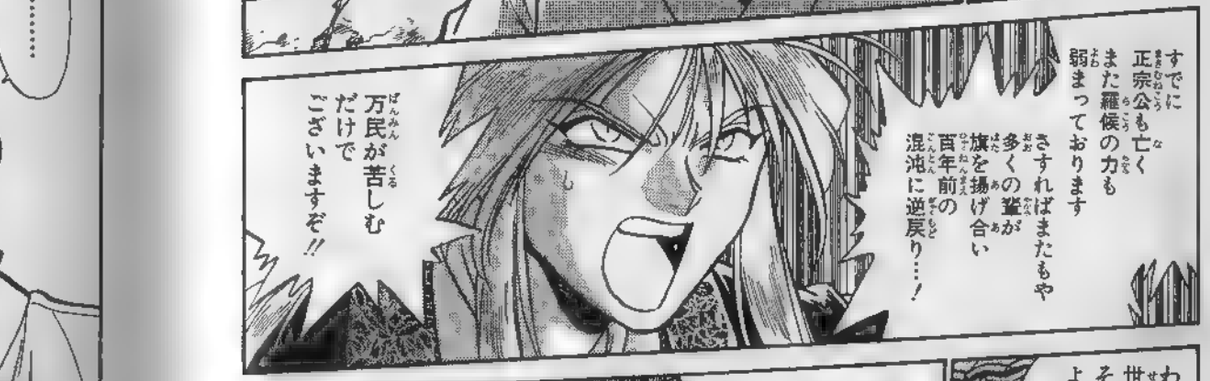
実は
竜王は先日
刺客に不覚をとり
重体となり
明日をも知れぬ
状態に…！
ぜひとも
先生の御診察を
いただきたく
ここに参上
つかまつった
竜王が
重体じゃと!?

項武！
…!!
しかし…!!
ははは
それは自業自得と
いうものじゃ！

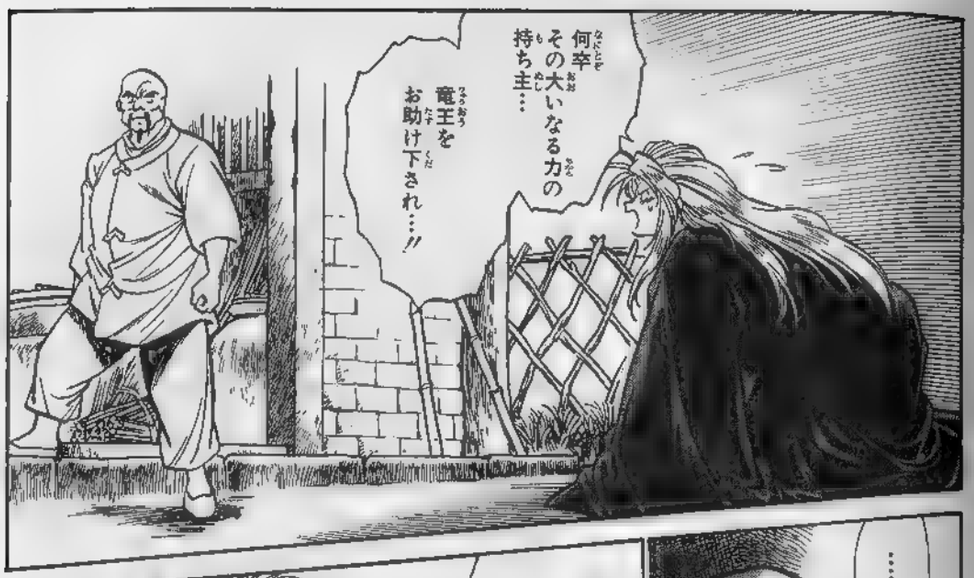
よいか！
竜王は我が主君より
奸計を用い
国を奪っただけではなく
その御命まで
虫を殺すが如く
奪い去ったのじゃぞ!!
な…!!!

主君智王様の
無念は
いかばかりか!!
他人の命を軽々しく
扱う竜王が
自分の命となると
途端に命ごいか!!!
それとて
その大男に命じて
力ずくで
このわしを引きずり
出して行くか!?
竜王らしい
やり方じゃ!!
ん…んが〜〜っ!!
これ!
塩を持って
参れ!!
は…
はい
先生!!
帰りなされ!!
次は
犬をけしかけますぞ!!
うだうだ
いってやがるが
要は治す自信が
ねえんだろ
このヤブの
モグリ医者が!!
このクソ親父!
医者が
患者を診ねえと
いうのは
どーいうことだ!
もう
我慢できねえ!!
やめんか
項武!!
誓いを
忘れたか!!
忘れやしねえが
じゃあこのまま
引き退がれって
いうのかい!
頼んでも来てくれ
ねえんなら
腕ずくにでも
引っ張って
行くしかねえだろ!!
いいから
落ちつけ!!
ええい
庭先でやかましい!
他の患者の
迷惑じゃ
帰りなされ!!
何いっ!!
こんな
あばら屋が
何だ!
火をかけて
やらぁっ!!
やめろ!!

先生！
お腹立ちは
ごもっともでしょうが
今一度
お考え直して
下され！
今 竜王が
亡くなれば
この銀河は
どうなるでしょう!?


すでに
正宗公も亡く
また羅候の力も
弱まっております
さすればまたもや
多くの雄が
旗を揚げ合い
百年前の
混沌に逆戻り…！
万民が苦しむ
だけで
ございますぞ!!

わしのような
世俗の医者には
そんなことは
ようわからん！
銀河を治め
戦いの無い世に
するには
大いなる力が
必要でございます!!


何卒
その大いなる力の
持ち主…
竜王を
お助け下され…!!

……
我が願い
お聞き届け
いただければ

軍師!?

ぐ…！
ポタッ
ち…
血迷われたか!?
先生に
我が肝を
進呈し…
これをもって
診察代と…
いたしたい…!!

よろしく
お願い…
いたす…！
軍師ーっ!?
ガァ
カァ
お…おい先生
どうなんだよ
軍師は…!?
思ったより
深くない
武士とは違い
腹に刺す力が
足りんかったのが
幸いじゃ

軍師!!
術後ですぞ
しゃべらぬように!
軍師として
智王の殺害を
勧めたのは
この私だ
そうでしょうな…
わかっていて
私を助けるのか?
仇であろう
先生…
本当なんだろうな!?
嘘いったら
承知しねえぞ!!
わしは医者じゃぞ!
患者の容態に
ついて
嘘・偽りなんぞ
いわぬわ!!
そもそもおめえが
うんといわねえから
軍師が
キレちまったんだぞ!!
やかましい
安静が必要
なんじゃぞ!!

先生!
俺からも
お願いします!
上手くいえねえけど
竜王様を
お助け下され!!
どうか
このとお――り!!
一人の人間として
患者として
先生を
待っております…!!
竜王には
先生だけが
頼りなんですぞ!!
竜王の命
救って下され!!
医者として
目の前にいる
患者は捨ておけん
なれば…!!

ハア
ハア
くくく…
いい様だな…
何が覇者だ…
何が天下人だ
おぬしはすでに死を待つ罪人にすぎん…

天罰よ…
ほんと…
相応しい最期ね
いい気味…
お変わりござらぬか竜王…！
地獄の鬼が亡者が落ちて来るのを首を長くして待っている
早く来なされ…！
この地獄以外竜王に相応しい場所はありますまい…
死ね！
死ね！
死ね!!

失せろ！
下郎が!!
おまえか…？
おまえが
こやつらを
連れて
来るのか？
飛竜よ!!
いえ…
あなたの
良心が連れて
来るんだわ
戯れ言を
ぬかすな!!

まもなく
天の決裁が
竜王に下る…
それを前にして
竜王の心が
病んでいるのだ
天だと…
アホ臭い…
天に
何が出来る!?
命を賭けて戦い
己の道を切り開く…
そんなこと
天には
出来まい…！
その天が
俺を裁くだと…!!
ふざけるな!!!

竜王様！
いかが
なされました!!
こ…これは…
急いで
寝所に
お戻しするのだ！
この日より
雷の容態は
更に悪化し
しばしば昏睡状態に
陥るようになる
早く！
早く
お願いします
そんなに
悪いのか…!!
はい
三日前から
危篤状態
なんです!!
師真様の名を
お呼びするのみで…
ガラガラ

…師真…
師真…！
雷!!
雷！
俺の声が
聞こえるか!?
俺が
わかるか!?
気が付かれた…！

し…
わかるか!?
わかるな!!
俺だぞ!!
そう耳元でがなるな…
聞こえてるよ…
何だ…
おまえの格好?
いや
これは…
ん?
皆も
何集まっている
いいか
よく聞け!
天下の名医を
連れて来た!
彼がおまえを
治してくれる!
いいな!

おぬしがその
名医か?
はっ
扶華と
申します
扶華だと?
あの智王の臣の
扶華か…?
はい…
扶華よ
嘘!
たしかに扶華殿は
智王の臣ではあったが
過去は抜きにして
おまえを診てくれるんだ
信じろ!
刺客の話は
聞いたか?
はい…
しかと
承りました…!
その飛竜が
よく俺の
枕元に立つ…
見届ける
つもりだろう…

この私を御信じなれませぬか？
元来医者と説教は嫌いでな…
雷！
医者はいつも死人の横に立っていた…
生き存えても手足を切断され…息があっても死体として処理された
医者には死の臭いがする…
だから俺は…
連中はそんな所に全身朱壺にはまったかのような出で立ちで立ってやがった
まるで地獄の鬼のように…

お…おい雷!!
ご安心なされ…
これを嗅ぐと死んだように眠ります
その間に腹を開き腐りを取り除きまする
先生それは…
秘伝の香でございましてな

先生…
頼みます…!!
お任せあれ!

天よ…
生まれて
初めて
あなたに祈ります…！

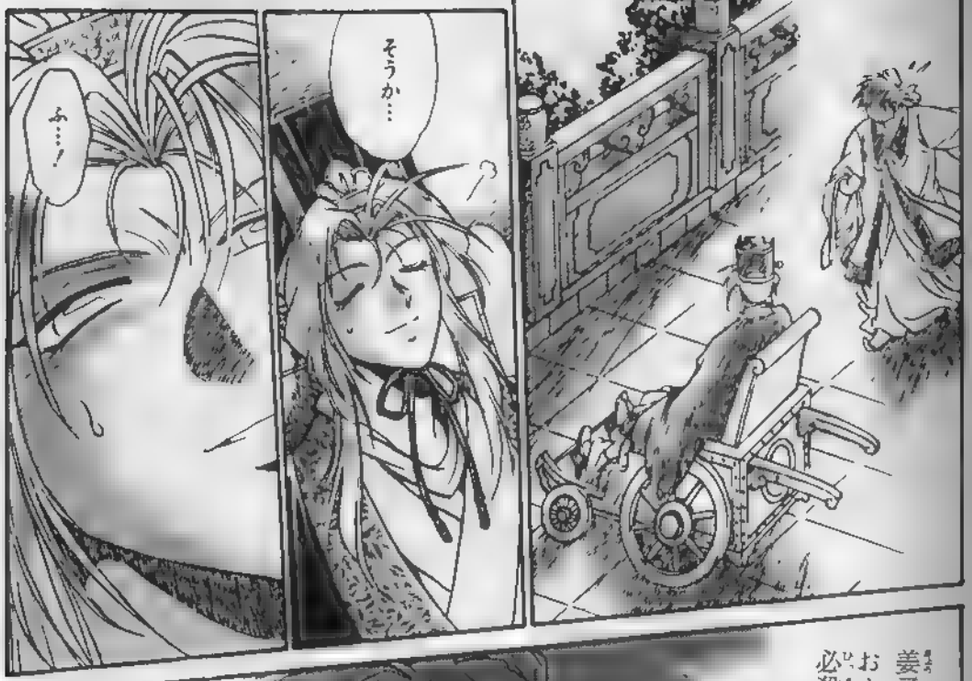
我が夢…
皆の夢…
断ち切らないで
下さい…！

それでは
始めますぞ
皆
落ちついてな

遅いっ!!
遅すぎる!!
将軍!!
どうなってやがんだ!?
あのヤブひょっとして…!!
我々が騒いでもどうにもなりませんよ!
扶華殿を信じましょう!
けどよう林軍師!!
竜王様は必ず助かります!!
ちくしょう!!
俺は親父に身体を盾にしてでも竜王様をお守りしろと口酸っぱくいわれてきたんだぞ…!!
それを易々とあの女にやられて今じゃ何もできずに見守るしかねぇ…
情けねぇ…!!

項武よそれは我々とて同じ思いじゃ
気を鎮めて待とうそれしかない
なーに竜王様があんな小娘一人に負けるわけはなかろうが!

先生!!
竜王様は!?
忌忌しい
ことじゃが…
未だ
竜王の悪運は
続くらしいのう


そうか…
ふ…!

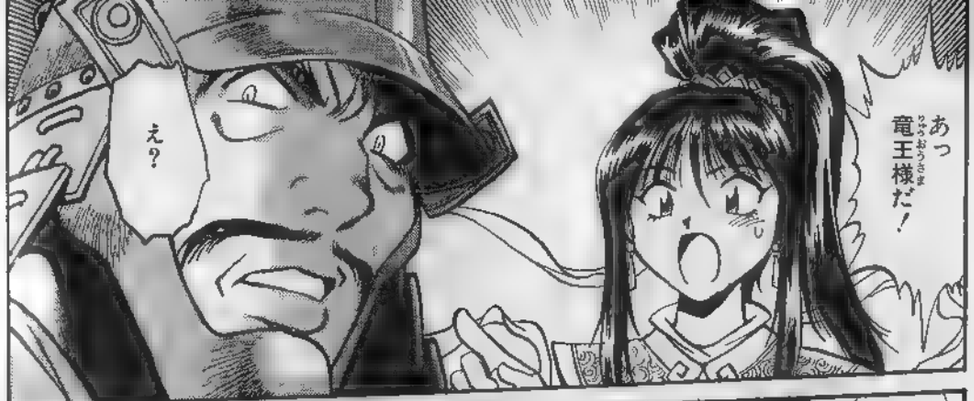
姜子昌よ…!
おまえの命を賭けた
必殺の策…!!
我々は
破ったぞ…!!!

どうじゃ
何か
おかしいとこは
ないか？
うーん
ちょっと
紅が強いかなぁ
姫様
着いたばかりで
まだ朝早よう
ございます
今しばらく
陛下のお出ましを
お待ちになりまして…
鏡！
鏡！
何いってるのよ
船酔いに耐えて
長旅を我慢したのも
偏に一時も早く
竜王様にお会いする
ためじゃないの！
あーもう
会いたいの！
竜王様に
早く会いたいん
だってばぁ!!
パニパニ
女！
どこへ行く!?
ここから先は
みだりに入ることは
許されん
無礼な！
このお方は
御側室
尚香様で
あらせられますぞ！
先程武王都より
お着きあそばれ
陛下に御拝謁を
賜るべく
参るところです
道を
開けなさい！
いや…
それは
遠い所を
御苦労でござる
しかし今は
ちと…
左様
陛下は御気分が
優れぬ故
だれも通すなとの
厳命で
ござる！
御気分が
優れないですって～!!
それなら
なおさら
あたしがお側に
付いておかないと！
通して!!
あ…あいや
しばらく…!!
しばらく
お待ちを!!

扶華殿！
もう
お帰りか？
後の養生は
侍医に任せておいて
問題はありますまい

いや
今帰られては
私が困る！
この度の
神業的な治療に
充分報いたい！
陛下とて同じ
思いであろう
しばらく
ここに
逗留願えまいか！
ここに
いるのは
辛くてのう…

扶華殿…
人払いだ
はっ


あっ
竜王様だ！
え？

よっ！
あっ！
わーっ!!
こ…
こら！
ちょっと…!!

たっ
わっ
とっ
お役目
御苦労様ー♫

先生のお気持ちはこの師真も理解しております
亡き主君を自害に追い込んだ竜王の命を助けたこと…さぞや御不快でありましょう
しかし…
そのようなことではござらぬ…
え？
数日だが五丈の陣営に留まりここの空気が智の王宮とは全く違うことを感じましてな…
そして大いに恥入りました…
恥入った…？
智にはおりませなんだ…

我が身を刺し主君と痛みを分かち合う宰相も…
主君の病状に一喜一憂し怒り涙し笑う家臣も…
智王の孤独さと寂しさを誰一人理解せずましてや共有しようと思う者はおりませなんだ…！
飛竜殿を含めて皆正宗公の弟！正宗公の遺業をと…！尻を叩くばかりで…
どうして智王の暗く冷え切った思いに光を灯せなんだのか…
そう思うと近臣の一人でもあった自分は身がすくむ思いじゃ
主君の自害…国の滅亡…それは確かに竜王様の仕業じゃだがその災厄を招き入れたのは我ら家臣の落ち度じゃろう

竜王は良き家臣に恵まれたのう…！

痛み入ります…

それとな竜王を救ったのはわしの医術の腕でも薬効でもない

は？

では何が…

〝欲〟じゃろう!!

何が何でも…例え身体が滅びようとも生き抜こうとする欲じゃ

あのお方はその欲が一際強いと見える

なるほど…

その欲の持ち主が天下人への道をひたすら進んでおる

腹減れば飯を食らうようにその欲を満たそうとする

おぬしは宰相としてその欲の行く末を見届けるべきじゃな

竜王の欲が満たされる頃にはわしはもうこの世にはおるまい

こうして智の名医扶華は雷の目覚めを待たずに飄然と去っていった

正宗智王二代に仕え雷の命を救った名医の名はこの後歴史上に見ることはなかった

う…
ぐす…
尚香
いいから
もう泣くな…
ひく…
だって〜…
ぐす
せっかく…
せっかく
お会いできるかと
思っていたのに〜
竜王様は
身体を起こす
ことも
できないなんて〜

そんなに
心配するな
すぐに
起きられるようになる
そうしたら
尚香を
かわいがってくだされ
ああ
そうしよう
だから
笑え
おまえの
笑顔が
一番の薬だ
はい…
陛下…
お薬湯で
ございます
あっ
私！
私が
差し上げます
侍医殿！
これから私が
陛下のお世話
いたします！
はあ
しかし
お薬は…
ご安心ください
私 医術も
たしなんでおります！
本当かあ？

理の男で
あるからこそ
一時のぎこちない
情で
我を忘れて
この様だ
ま
結果的に
竜王は助かった
たまには情のままに
行動してみるのも
いいことだ
あきれた…
男って
時々
わからなく
なるのよね
じゃあ
今晩よく
教えてやるよ
そんな身体で
何いってるの！
大人しく
してなさい！
いてっ!!
あのう…
よろしいですかぁ？
お――
林かぁ
入れ
これはまた
おくつろぎの
ところを
お邪魔します
余計なこと
いうなって！
それより
竜王のご様子は
いかがか？

これから
習います！
そ「ぱ」!!
何やってんだか…
それは
俺のこの傷の
ことか？
ええ…
説き伏せる材料が
無いからといって
自分の腹に
刃物突き刺すなんて
いつの間に
理の人
大覚屋師真は
そんな
情の人に
なったの？
そう
いうな！

はい
それはもう
尚香様が
大そう良く
お世話
なさっているようで
陛下の
回復も早く
侍医達も
驚いています
そりゃあ
美人の
二十四時間
看護なら
治りも
早かろうて
な！
おあいにく
私そんな
美人じゃ
ございませんの
かーっ
女は愛した男には
総じて冷たいって
いうがよ
どう思う？
林！
はぁ
それは私
存じませんが…
んなことといって～
国に帰ったら
蘭々との挙式の
くせに～～～
そ・そ・そ
そんなこと
だれが
決めたんですか!!
あ…
いや
それより――
南蛮に向かった
傅格よりの
報告です
うまく
もぐり込めた
ようだな
はい
南蛮の宰相の
屋敷に客として
迎えられた
そうです
今のところ
南蛮国は
一枚岩か…
どーも
敗れた羅候に
対して
城門を閉じることは
しなかったようだな
しかし内容は
かなり複雑な
ようですね
それと
こちらに
弟君・英真殿の
消息が…
ほう
拘束を解かれ
南蛮の客卿に
任じられたとか…
まずは
安心ですね
いや…
羅候が
人質の価値に
気付いた
だけのことだろう
それだけに
救出も
むずかしくなった…
英真が
今
どういう思いで
いるかは
知らぬが…
こちらの
遠隔操作にも
限界がある

後は自分の機知をもって乗り切ってもらうしかないな…！

何だ？何がおかしい

クス…

いえ弟さんのこととなると突っぱねた物言いをなさいますけど…

内心はよくよくご心配なさっているんですね

バカいえだれが…！

クスクス

笑うな！

はいはい

…ったく…

だが師真にはもう一つ他の心配があった

英真の提唱している和睦とその後の南北二朝での銀河統一思想が師真の心を暗くしていた

英真は逆境になればなるほどその実現に熱を入れるだろう…

だがそれは竜王の意志に背くことになる

竜王は…雷は…英真の命を助けるとはいってくれたが…その思想を許すのだろうか…

そして…

俺は英真を庇いきれるだろうか…

あ――ん

は――い

あ――ん

一方
北京沖の会戦で
大敗を喫した羅候は
自らも矢傷を負い
妻の生国でもある
南蛮国に
落ちのびていた

まだ南天に
無数の小国が
乱立していたその昔
その中でも有力な国であった
南蛮国は羅候の妻・邑峻の
父である
琥瑛鳳洲によって
治められていた

やがて羅候は
この琥瑛鳳洲より
王位を譲られ
南天の盟主としての
立場を固めたのである

後に南天全土を
有した羅候は
元々興味のない
南蛮国の統治を
琥瑛鳳洲の三人の実子に
共同統治者として
治めるように命じたのであった

これは
名目上の肩書きでも
弟達に与えて欲しいと
邑峻に懇願された
ためでもある

先王の
長男
杵臼
次男
杵如
三男
慶克
だが三兄弟ともそろって凡庸・惰弱であり
とても一国を統べることは出来ぬと案じた羅候は
重臣の一人・勃鞮を宰相として送り込んでいた
勃鞮は羅候が落ちのびてくることを知るとただちにその意を三王に上奏じ出迎えさせたのであった

南蛮国には名目上とはいえ四人の王が存在することとなって一月…
表面上は破れた羅候を快く迎えた南蛮国ではあったが…

五丈軍の急接近に伴い内部に多くの軋みが現れていた
兄上はいかが思います？
何をだ？
羅候様のことでございますよ

羅候様を
お迎えしたのは
間違いでは
ございませんか？

何をいう
杵如
口を慎め！

仮にも羅候様は
亡き父上が
この南蛮国を
お任せしたお方！
また我が
姉君の夫でも
あるのだぞ！
お迎えするのが
当然ではないか

それが
おかしいので
ござる

何と…！

よいですか
兄上！

この南蛮を
治めているのは
我々三人でござる
これに何の不都合も
ございません

そこへ今さら
己の行き場を
失ったとはいえ
気にもとめなかった
この国にやってきて
いきなり
主君顔では
納得できませぬ！

そもそも
何の血の繋がりも
ない男を
婚姻関係のみで
王位に迎えたのが
間違い！

左様
あの時
父上は病気故
弱気になって
おられた
そこをあの
虎男に突かれたのです！

申し上げます

何だ!!

羅候様の
お呼びで
ございます…

ま…また…！

まるで
子供を呼び
つけるかのようじゃ！

しかし
行かねば
なるまい…！

また何か
無理難題を
押しつける
所存か！

南蛮王
お三方
参られましたー
おう
来たか！
御尊顔を
拝し奉り
まことに恐悦至極で
ございます
お身体の方は
いかがでございましょう？
ふん！
あんな矢傷など
何ともないわ
今回その方達を
呼んだのは他でもない
軍需物資の
調達の相談が
したいからだ

発興！
はっ
南蛮国は
次なる物資を
調達すること！
その一！
糧食八千万トン！
その二！
武具・盾五百万人分！
その三！
弾丸・硝薬六千五百万トン！
その四
十八歳以上
四十五歳以下の
成年男子を
残らず召集し
我が南天軍の
指揮下に入れ
訓練を受けること！
なお
それらの兵の
経費は
南蛮国が
支払うこと！
その五！
保有艦艇の全てを
徴発！
必要な船乗りを
確保すること！
その六…！
お お待ち下さい！

ん？
何だ？
そ…それだけの莫大な物資この南蛮国のみで御用意するのは不可能でございます！
国庫が空になるばかりでなく民・百姓を飢えさせ国亡びます！
何卒御明察のほどを…!!
民を慈しみ甘やかすだけが君主の仕事ではないわ!!
時には絞り取らねばならん時もある！それが今なのがわからんのか!!!
こ…この南蛮国の君主としてそのような無体な要求受け入れられませぬ!!
だれのおかげでその玉座に座っていられると思っているか!!
よいか!!
南天の盟主としておまえ遠三人に命令する!!
王の冠を失いたくなければ我が要求に応えよ!!
ひっ!!
一月以内にだ…！
わかったな!!!
は…
ははぁ～!!

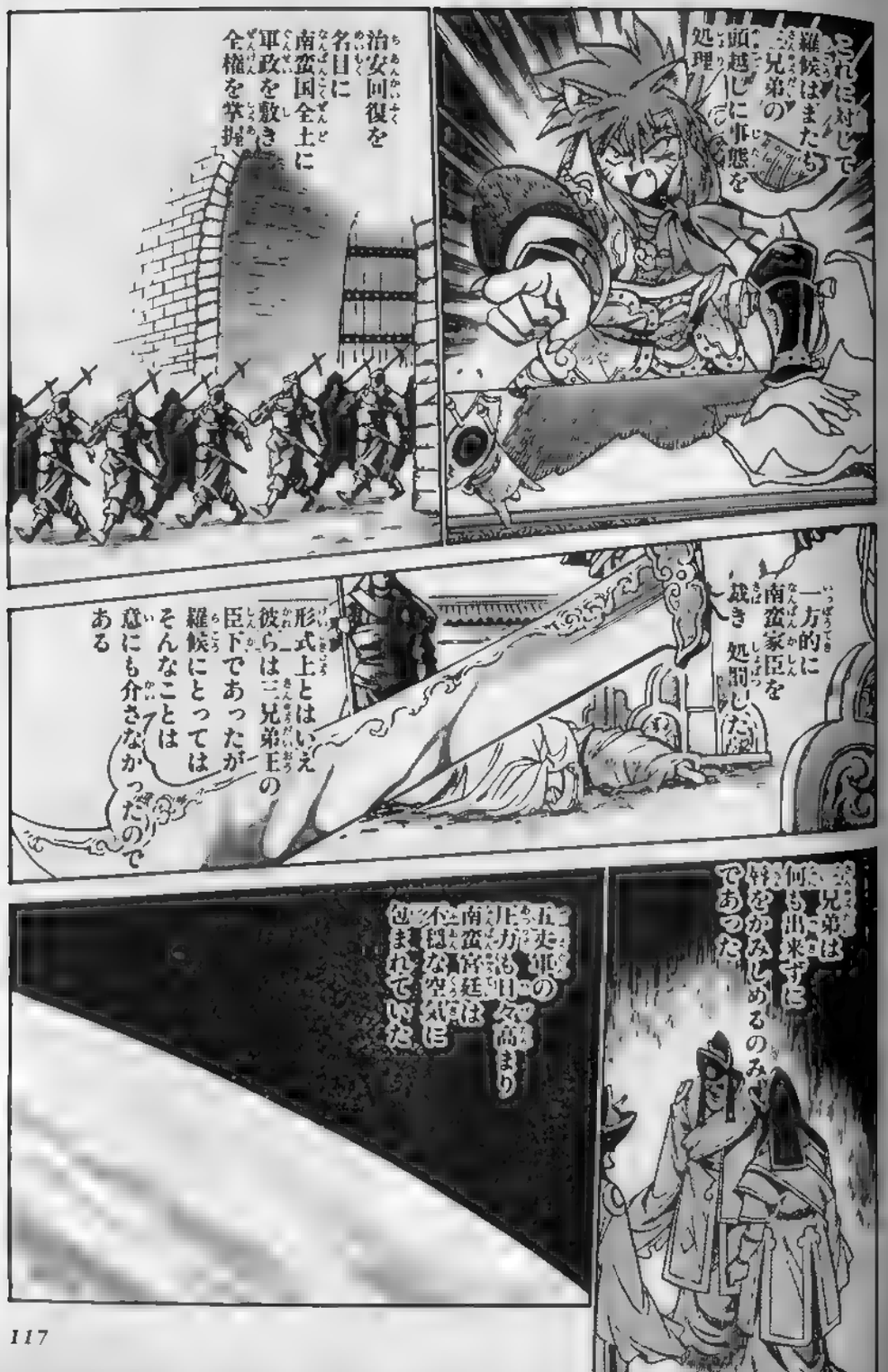
羅候が
欲しいって
いってるんなら
用意するのが
あんた達の
仕事でしょ！
そろえなさい！
姉上！
姉上も
この南蛮で
生まれ育ったでは
ございませんか！
父上を初めとして
先祖代々
築かれたこの国が
愛しくありませぬか！
何卒
南天王様に
お取りなしを！
そんなこと
いったって
あたしはもう
羅家の女よ
嫁いだからには
実家より
嫁ぎ先を
大事と思うは
当然でしょ！

何様のつもりだ！
国追われて
南天の盟主だと！
笑わせるな!!
弟よ
今はそれより
この莫大な
物資の要求に
どう応じるかだ
兄上
応じるつもりで
ござるか!!
おぬし
南天王の考えが
読めぬのか！
無理難題を
押しつけて
我らの怠惰を貫め
南蛮国の
王位を剝奪する
腹だ
そして
自分の子の一人を
我らに代わって
王位に就けようという
魂胆に違いない！
ううう…
だからといって
これだけの物資
集められる
わけがない！
そこでだ
ここは一つ
姉君に
おすがり
いたす他
あるまいと
思うが…

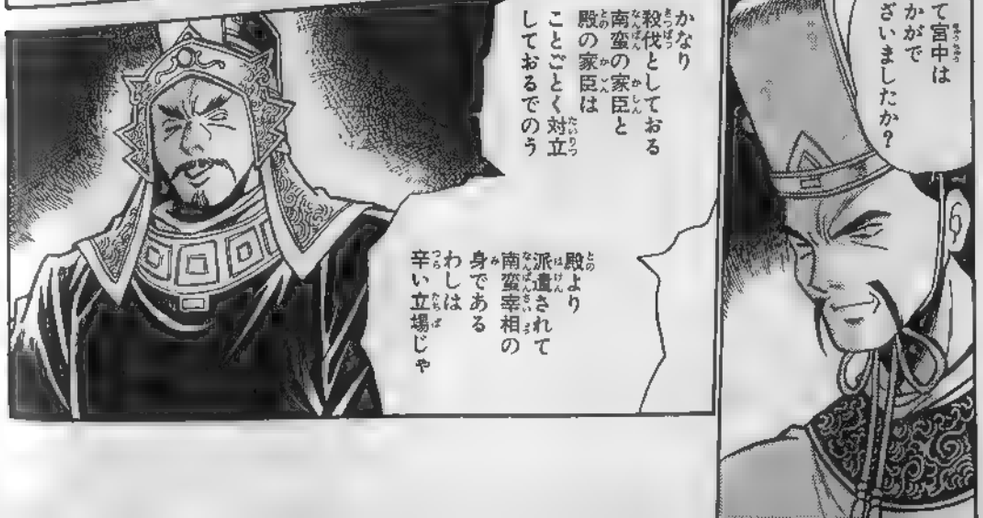
そもそも天下を狙うのに南蛮国一国をとやかくいう方がおかしいわ！
もっと目を大きく見開きなさい！
あ…姉上！
姉上――っ！
姉上！どうかお取りなしを!!
……
思惑の違いがあるとはいえ羅候は常に二人の兄弟王の頭越しに命令を発しそれをまた当然と考えていた
主君の態度は臣下にも及ぶことになる
南蛮国に降り立った将兵は勝手に諸大臣の屋敷に入り込みその官職を奪い家族・使用人を我がものとした

ほう美しい娘じゃのう
来い！
おまえの主人はこのわしだ！
ひっ！
ああっ何辛何辛…！
一人娘でございますお許しを！
うるさいっ!!
我らは王軍ぞ！慰労じゃ慰労じゃ!!
王軍!?
我らとてこの南蛮国の家臣！このような仕打ち我慢なりませぬ!!
南天王に上奏し事と次第を申し上げます
やかましいっ!!!

うぬ！
この狼藉
許せぬ!!
皆の者！
出合え！
出合え!!
同じ南天同士とはいえ
敗残軍の進駐軍を
快く受け入れられる
はずもなく
各地で騒動が
頻発していた


これに対して
羅候はまたも
兄弟の
頭越しに事態を
処理
治安回復を
名目に
南蛮国全土に
軍政を敷き
全権を掌握
一方的に
南蛮家臣を
裁き
処罰した
形式上とはいえ
彼らは二兄弟王の
臣下であったが
羅候にとっては
そんなことは
意にも介さなかったのである
兄弟は
何も出来ずに
ただ
をかみしめるのみであった
五支軍の
圧力も日々高まり
南蛮宮廷は
不穏な空気に
包まれていた

うむ
宰相様
お帰り
なさいませ


して宮中は
いかがで
ございましたか？
かなり
殺伐としておる
南蛮の家臣と
殿の家臣は
ことごとく対立
しておるでのう
殿より
派遣されて
南蛮宰相の
身である
わしは
辛い立場じゃ

胸中
お察し
します
しかし
そろそろ
宰相様も
お覚悟を
決めねば
なりませんなぁ
その話じゃが
本当に
竜王はわしを
重く用いて
くれるの
だろうな
もちろん！

その証として…

おおっ!!
陛下は
勅使様の
働きに期待
していらっしゃいます
これは
これは

陛下は
南天王が
ここ南蛮で
力を盛り返すのを
望んではいません
事を早く
決したいと考えて
おられます
この南蛮国を
戦火に巻き込まない
ようにするには
南天軍残党を
ただちに追い出す
必要がございましょう
うむうむ
わかった…
確かに時期が
来たようじゃ
このわしに
任せていただきたい
よしなに…

南蛮王朝と
南天軍残党との
緊張関係が
続くこと数か月
その不穏な空気の許で
南蛮宰相を
取り込んだ
五丈の策謀が
動き出していた
お帰りなさいませ
ああ
ただいま…

首尾は
いかがで
ございましたか？
羅候様に
お話できましたか
いや
今日も
だめだったよ
龍緒様の
裏からの力添えも
あって
客卿扱いされては
いるが…
それはただ
朝議の末席に
名を連ねてるだけで
羅候様に
信頼されての
登用じゃないからね
……
焦りは
禁物です
何とか
五丈と南天とを
和睦させ
二王朝による
太平の世を
作り出したい…
戦火に
喘ぐ民を
救うには
それしかないんだ
しかし
いかんせん
私には
それを実行に
移す力がない…
わかっている…
わかっているけど
時間がない…

龍緒様は
三代に渡って
宰相を勤めた方
南天の中にも
多くの龍緒派と
目される方々が
いらっしゃるはずでは…
南天は
五丈とは違い
専制君主の一言で
全てが決まる
体制だよ
そんな中で
臣下が数集まっても
何の力も得ない
私の考えを
実現させるには
何としても
羅候様の後ろ盾が
必要なんだ
羅候様に
会えば…
話ができれば
口説く
自信はある…！
いや
口説いてみせる！
天よ…
私に
機会を
与えてくれ…
……
あのう…
これ…
役に立つ情報か
どうかは
わかりませんが…
ん？
何か
あるの？

南蛮宰相
勃鞮様の周辺が
慌しさを
増しています
勃鞮様の？
詳しく
話してくれ！
私と同じ
龍緒様の
手の者の話
なんですが…
宰相と
南蛮三兄弟王の
間とでしきりと
使者が出入り
しているとのこと…
また王のうちの一人の
別邸で
会合に及ぶこと
すでに十数回と…
宰相と王が
会っても何の
不思議もあるまい
主君と家臣の
間柄
話し合うことも
あるさ
勃鞮様は
南蛮家臣とはいえ
その実は羅候様による
三王のお目付け役ですよ
三王もこの男を
嫌っていました！

そのお目付け役と
三兄弟王が
接近しているわけか…
他には？
これは
未確認情報ですが…
宰相宅に
遠来からの客が
長期逗留しているとか…
ふうん…
もう少し
詳しく調べて
くれないか？
はいっ
すまない…
私の
家臣でもないのに
こんな危険な
ことを頼んで
しまって…
いえ
お気になさらないで
下さい
あ…
？

私はあなたのお考えに心から賛同しているのです
お役に立てて うれしいと思います
ありがとう 私として 太平の世を見出すために この身を捧げるつもりだ
！
こうして 英真の意を汲んだ 麟は他の 龍緒配下の者に 呼びかけ 南蛮宰相の許を 洗いはじめた
そして 幾日を 経たない間に…
新たな情報を 英真の許に 届けたのである

やはり 宰相宅の客と いうのは 五丈の者だったのか…
はい 宰相勃緋様とは ごじっこんの 間柄でございます
敵の中に味方を作る… 兄上が好んで用いる策だ…
その五丈の家臣が 宰相を動かし… その宰相が 不仲である三王に 接近していると いうことは…
!!
証人と 証言をそろえ なくては！
はい

英真は
宰相邸の門番から
始まり
宰相宅の
使用人を次々と
買収し
金で動かぬ者には
脅しをかけ
ついに
宰相邸の家宰(執事)を
呼び出すことに
成功した
……
英真様
それがしに何用で
ございますか…？
家宰殿
ご家族は
ご健勝ですか？
はは っ
妻をはじめ
息子共々
つつましいながらも
まずは
健やかに…
そうですか

そのご家族を
つまらぬ
企みごとで
悲しませてはは
なりませぬ
……
こうして家宰は
決定的な証言を
書き残したのでは
ある
やはり
宰相と三王は
羅候様への
謀反を
考えていたのか…！
しかし
英真様は
五丈の人間…
そのあなたが
なぜ謀反の芽を
摘もうと
なさるのですか？
今
羅候様の
力を弱めることは
決して
得策ではない！
今
南天は羅候様の力で
かろうじて統一
されているのだ

もし
羅候様を
亡き者としたら
南天はそれこそ
バラバラに
なるだろう

そんな国を
竜王様は
決して相手になど
しない！

和睦とは
相手がいなくては
意味がないからだ

バラバラの南天なんぞ
五丈にとって都合よく
併合する対象に
なるだけだよ

とにかく
これだけの確証が
あれば
羅候様も
私を引見して
下さるだろう

これで
少しは私の
心証も良くなるに
違いない

だが英真は
浅はかであった

竜王の臣下では
ないとはいえ
五丈の戦略の
一つをくじいたことに
なることの
意味を深く
考えていなかった

この事実を知った時の
竜王の冷たい怒りを
考慮して
いなかったのだ
そして
丞相である兄の立場も

理想である
和睦を進めようと
するばかりに
英真は冷静な
判断力を失っていた

何？

あの英真が
こんな時間に
上奏だと！

おとおい
来いと
いってやれ!!

何？
謀反!?

よし
会おう！

連れてこい!!

これを
ごらんあれ
ふん！
な…
何だ
これは!?
南蛮宰相
勃興様謀反の
計画についての
家人による訴えで
ございます
証人も
揃えております
ご引見なされて
くだされ
それには
及ばぬ！
そういえば
あやつ…ここ最近
病と称して出仕
していなかったな…!!

おまえは
いったい
竜王に忠ならんと
するのか!?
それとも
この俺に仕えんと
する者なのか!?
どっちだ!?
お言葉
ごもっともで
ございます
それがし
五丈の人間で
ありますが
竜王の家臣では
ございません
強いて申せば
五丈と南天
両方の領民に
忠あらんことを
願います
領民にだとぉ!?
まあいい
謀反とか
いったな
いいかげんな
ことをいうと
首をはねるぞ！

宰相宅に参る!!
鎧を持ていっ!!
何?
殿が参られた?
失礼の無いようお迎えせねば…
殿
こ…これは
このような夜更けに何故拙宅に参られました?
お!勅使身体の調子はどうだ?
実はな良い医者が宮中におってなそれ故取るものも取りあえずおぬしを迎えに参ったまでだ

それは
それは
お心遣い
ありがとう
ございます
早速
馬を用意して
参りますので…
その必要はない…!!
おまえ用の
馬車なら
用意してある!
こ…これは…!!
どうだ
吐いたか?
はっ
少しばかりの
拷問で洗いざらい
ちっ
そんな根性なしで
この俺様に対して
謀反とは
ふざけやがって…!!
奴の屋敷から
五丈からの物と
思われる金品と
書状も出て
参りました
それで
三兄弟王の
関与は確かか!?
残念ながら…
宮廷の
近衛兵を
動かすつもりで
あったようです
くそうっ!
名前だけの
王のくせに!!

お怒りはわかりますが王は奥方様のご兄弟でございます何卒穏便なおはからいを…
そうだな…
その必要はないわ
！
邑峻！
あなたに対する謀反なんかもっての他！ましてや親族がだなんて!!
あたし達のかわいい子供達まで危ない目に遭わせようとした奴らを許せないわ！
好きにして羅候！
兇興！
はっ何なりとお命じください
三王を討て!!
一族郎党皆捕まえてくるのだ!!

こうして
五丈側が策した
謀反は
あっけなく発覚し
南蛮王家は元より
宰相勃鞮以下
多くの高位高官が
捕えられ
一族郎党斬殺された

その数は
千人にも
のぼったという

ありがたき幸せ…！
ねえ羅候 何か官位を差し上げては
そうだな
よし英真 おぬしを侍中の官位を与える！
朝夕俺の近くに仕えるがいい！
はは――っ！

えーと
厚朴に
貝母…
それに
牡丹皮を
少々…と！
なになに
それをすりつぶして
大さじ二杯の真水を
加え
半量になるまで
煮つめて布でこすか…
うわっ！
……
ハラハラ

何
アレ？
ああ…
尚香のやつが
侍医に手ほどき
受けたとかで
俺の薬を作って
くれてるんだ
薬を？
おまえ
ああいうの
飲んで大丈夫
なのか？
そこはそれ
上手く取り
はからってるよ
薬にも毒にも
ならないように
材料をしつらえてある…
侍医からは
ちゃんと正規の
薬を
用意して
もらってるから
安心しな
姫様
お花が！
隠して
隠して！
薬にも
毒にもねえ…
飲んでやれば
喜ぶからな
おーおー
ほんと女には
優しいこって

…で
何だって？

ああ
南蛮の例の
三部族長が
到着した

この前の
部族長会議に
欠席した連中か

他の部族長に
促されてな

よし
会おう！

あっあっ
竜王様！

お起きに
なられるのなら
お薬湯を
お飲みになって
ください～

尚香
一生懸命に
作りました～～～！

薬湯って…
すごい色だな…
茶色というか
黒というか

丞相様も
どうぞ

えっ!?

何でも
お腹をケガしたとか…
今日いらっしゃると
聞いて私が
見つくろって
みましたの

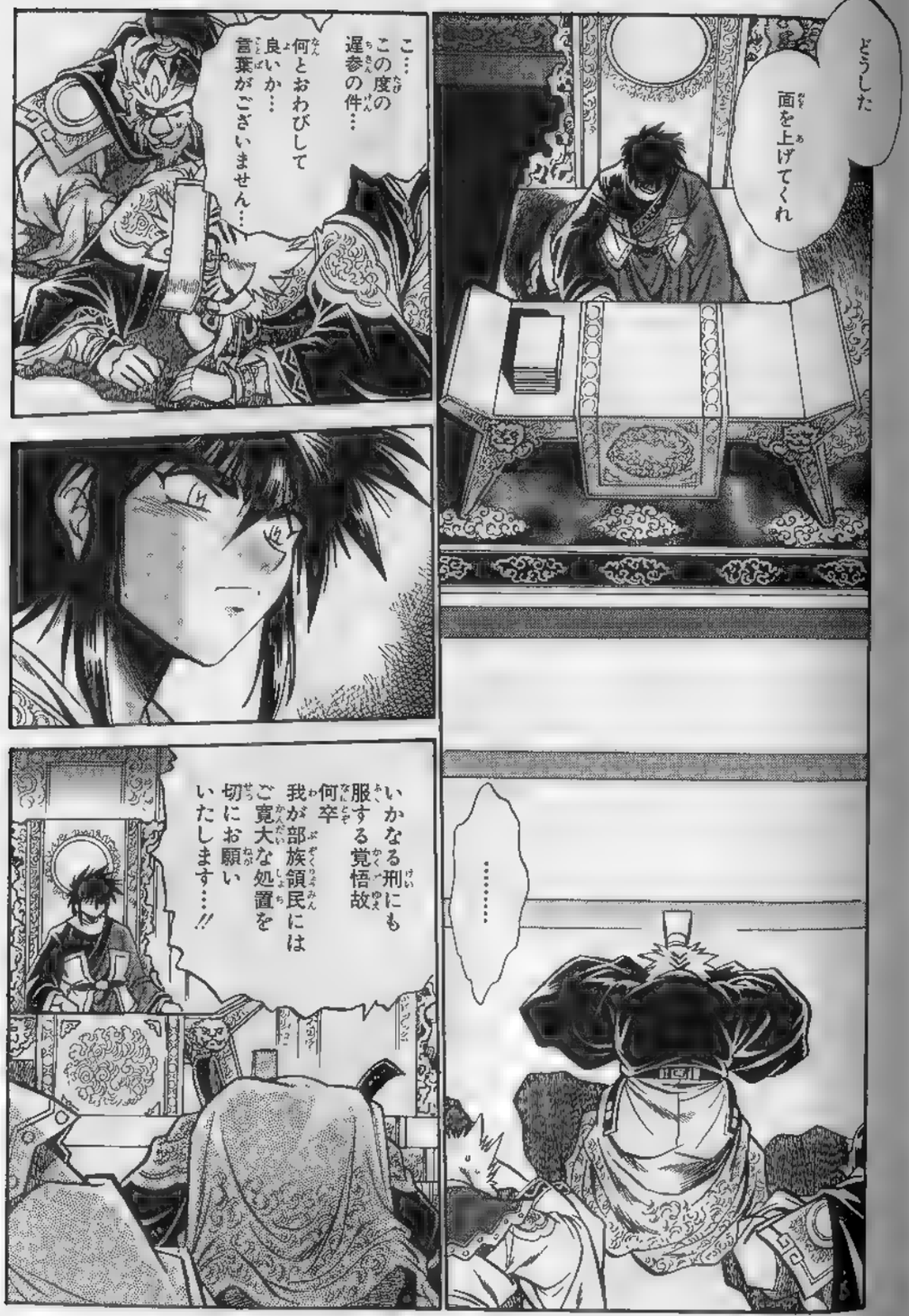
よく
効きますよー

すげぇ にがい
というか しょっぱい!!

あら
良薬は
口に苦しですわ

こーいうお薬は
苦ければ苦いほど
効きますのよ

虎力族族長
黄獅
西海竜族族長
摩昂
紅孩族族長
四木金星
南蛮の中でも
最大最強部族である
彼らはその力を頼り
竜王を盟主とした
新南天部族長会議にも
参加を拒んでいたのだった
だが西羌の滅亡を
目のあたりにしては
態度を改めるより
他なかった
仲介にあたった
他部族より
竜王の怒りを
聞かされた彼らは
自分の首を
差し出し
一族の助命を
願うしか道はないと
悟っていた


どうした
面を上げてくれ
こ…
この度の
遅参の件…
何とおわびして
良いか…
言葉がございません…
……
いかなる刑にも
服する覚悟故
何卒
我が部族領民には
ご寛大な処置を
切にお願い
いたします…!!

ビュッ
カン
何をいう
遅参など
過ぎた話だ
怒ってなど
おらぬ
え？
こうして
南蛮では
最強部族の
おぬしらに会えたのだ
さあ
立つがよい
はは っ!!
おぬしらには
特別に俺より
頼みがある
まずは
祝宴だ

何と!?
我ら三人で
南蛮を
治めよと申されるか!?
その通りだ
もちろん
おぬしらの領地
風俗・信仰も
そのまま認めよう
南蛮は
南蛮の人間が
治めるのが
一番都合がよい
おぬしら
三部族は
互いに
不可侵条約を
結び
南蛮での
諸問題を
力を合わせて
解決するのだ
それで
南蛮は
安泰だ

また おぬしらの 子弟には 五丈での上馳の 地位を 約束しよう
父は南蛮を 子は俺と共に 我が帝国を 支えて欲しい
この竜王 たっての願いだ 聞いてくれるな？
遅参の件での 竜王の激怒ぶりを 他の部族から 聞かされていた 一部族は 族殺も覚悟して いたのだが…
一転このような 竜王の厚遇ぶりに 夢を見ている思いで あった

我ら三部族 五丈と共に 生きることを 誇りに思います！
では皆 盃を！
共に 栄えようぞ!!

これで南天諸部族の対策はいいだろう
バラバラになっているより三つとはいえ統合されていた方がこっちとしても支配しやすい
後は徐々に五文化してゆけばいい
まあ奴らの息子の代には南天も変わっているさ

白虎嶺にて雷が劇的に回復したのとは逆に斉王都では雷の股肱の臣二楽斎の命が日夕にせまっていた…

激務に加え此度の御心痛御心労じゃ…
あのおやつれよう…長くはありますまい…

孟閣殿!!
いやはや
お懐かしい!
お久しゅう
ございますなー!!

何だか
ふわふわして…
何というか
底が無いというか…
こりゃ
歩きにくい
おっ
あっちから
灯りが…
助かったわい
おりよ?
ここは
どこじゃあ?
は――て…
ふにゃ…

うわあああっ!!
ゆ…ゆゆ…

あ…
さ…三楽斎様がお気づきになられましたぞ!!
陛下!御快方おめでとうございます!!

おめでとう
ございます!!

うむ!!
皆には心配を
かけたな
この通り
五体満足で
ここに座っておられるのも
皆のおかげだ
いえ
これも全て
陛下の恩徳の
賜物でございます
まったく!
陛下の御武運が
天佑を導いたの
でしょうな!

武運?
悪運の
間違いじゃ
ないのか
士元!
あ…
いや
滅相も
ございません!
しかし
此度のことは
つくづく
我々が敵地の
ド真中にいることを
思い知らされた…
気を
引き締めねば
ならん!!

軍議を
始める!!!

想像以上に
補給が厳しく
なっているなぁ
開戦時の三分の一
じゃなぁ
五丈本土の混乱と
この遠路では
致しかたないが…

現地調達も
無理はできませんね
属国化ホヤホヤの
国を締め上げるのは
自殺行為です
今までも
徴発ではなく
〝購入〟してたんだ
だが
肝心な
軍資金も
底をつき始めた
…ったく
せっかく
大王理に弾も
油も食いもんも
貯めこんだのによー
一瞬にして
パーッだ！

竜王様の命を
狙ったことは
論外だが
食いもんのうらみ
だけでも
姜子昌の野郎を
八つ裂きに
したいぜ！
ところで
先の軍議で
軍師は兵を
選抜すると
言われたな
ああ
少数精鋭で
行くと…

つーことは
俺達の何人かは
ここで留守居
させられるって
わけか？
そーいう
ことになるな…

ま
先鋒は
この項武様しか
いねえだろうよ！
当確!!
俺達は
陛下が師団長時代から
従ってるんだ
まずは俺達が
選ばれるってもんだ
までまて
ぬけがけは
許さねえぞ
そうそう

いえいえ
ご両人！
これより先は
全くの道不案内
ここは怖れを
知らない若手に
お任せを！
何だと孟起！
俺達を年寄り
扱いしやがんのか！
ヒヨッコは
ひっこんでな!!
まあ
まあ
落ちつかれよ
各々方
お忘れか？
軍師様は
少数〝精鋭〟と
申されたの
ですぞ
！
早いとこ
軍団にもどって
兵を鍛えよう！
俺も！
陛下に
閲兵
願わねば!!

あら
将軍方の
お帰りですわ
姫様
ホント！
じゃあ
竜王様も
お暇になられたのね
きっと
軍議でお疲れよ
お休み
願いましょうっと
ふむ…
南蛮の三部族も
帯同させるか
将来
皇帝の出陣には
常に王自ら
軍を率いて参加
させるように
するためです
実戦力などは
期待はできませんが
彼らの忠誠心は
計ることができましょう

申し上げます!!
傅格様がお戻りになりました!
傅格が?

南蛮王国より羅侯を追い出すために謀反を画策していたはずだが…
何か異変があったようだとにかく会おう!
はっ!

傅格どうしたその姿は!?
!
申し訳ございませぬ…!

南蛮宰相勃親による謀反の計画は発覚いたしてございます
何っ!?
それでは…
はい…三兄弟王・宰相それに連座する者ことごとく捕らえられ首をはねられました

それがしは平民に身をやつしてかろうじて…
それが…
?
ん?

羅侯の取り巻きにもまだ目の開いた者がいたのか…
ちっ!!
どうした?
思い当たる者がいるのか?

……
申し上げにくいのですが…
な…
丞相の弟君…
英真殿かと…
何いっ…!?
確かか？
確証はあるのか!?
はっ
それがしが身を潜めてる折りに耳にした話によりますと…

南天王自ら此度の謀反摘発の第一の功は英真殿と評しておるとか…
また その功により侍中位に…
もうよい！
何たることを…！
よりによって…あいつが…!!

ははーっ！
りゅ…
竜王陛下!!!
……

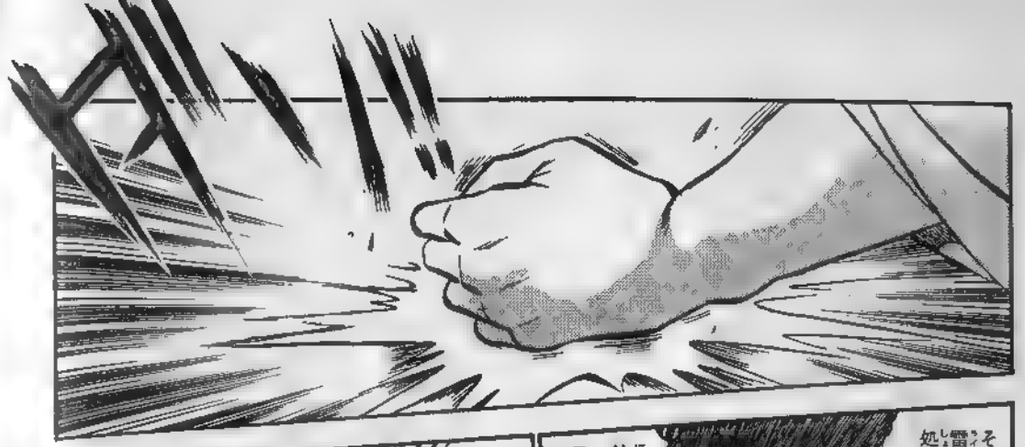
傳格
苦労をかけたな
しばし休息をとれ
後で詳しい話を聞こう

あ…
承知しました…

……
ん？
どうした？尚香
え…
いえ…
その…
俺が怖いか？

あ…
いえいえ
とんでもない
そんなこと
全然ないですー
ただ…
今日の竜王様は
何か近寄り
難くて…
そうか…
鬼に
見えるかも
しれんな
鬼に…！
「弁慧は乱の算なり！」
「礼楽は淫佚の徴なり！」
「慈仁は過ちの母なり！」
「任誉は姦の鼠なり！」

「蒼を用いられば即ち
民その親に親しむ…」
「姦に任ずれば即ち
民その制に親しむ」
「人主　守りを失えば
即ち危うし…！」
「君臣　法を釈て私に
任ずれば　必ず乱る…！」
「数峻令を加えて
その刑致らさざれば
即ち民　死を徼る…！」
「理は情を制し
法は理を統べる…」
「民を傷るを求むるに非ず
以って姦を禁じ過ちを
止むるなり…」
「故に曰く…
刑明らかにするの
猶は
無刑に至る…！」



そうだ…
俺はこの俺に
処断を委ねたのだ…
他の誰でもない…
この俺に…！
やらねばならん…
何がなんでもだ…！
英真の罪は明白だ…！
明白であればこそ
この俺の手で…

俺の手で…

ここは
元宰相龍緒を
頂点とする
龍一族の封地である
罷免されたとはいえ
その勢力は
一代に渡って宰相を
南天王朝の中で
勤めた実力者を擁する
比類なき
一族である
強固なもので
あった
龍鳳波は

事実
龍緒の実の息子達は
南天王朝の要衝を占め
龍一族がなければ
政府が成り立たないという
状況であった
いかがいたします
龍緒様

五丈による
南天の実効支配は
着実に進んで
おります
左様
このままでは
南天は五丈の
版図の中に
永久に埋没
いたしましょう
……
姜子昌将軍を
失った今
もはや軍事的に
対抗するのは
不可能です
その姜将軍の
ことじゃが…
まだ殿の耳には
入っておるまいの
はっ
殿の周りの者には
口封じをしております
ご子息龍簡様が
内大臣故
万事おこたりなく…

殿は姜将軍に
全幅の信頼を
置かれておる
今 南蛮国に
逼塞しておるのも
姜将軍の
復帰をお待ちに
なられておるからじゃ
いつか
自分のために
大軍団を仕立てて
帰ってくると
信じておるのじゃ…
もし
その殿が
姜将軍の
あのような横死を
知ることになれば…
怒り狂い
必ずや五丈に
決戦を挑もう…!
誰も
お止めすることは
できまい
そして
それは我々が
推し進めている
南天の存続の道を
永久に閉ざして
しまう
五丈丞相の実弟が
殿の許で
重用されていると
聞きましたが
英真殿か…
捨て身で
殿に取り入った
ものの
いかなることに
なるやら…
あの男
人の情にて
事を成せると
考えておる

商人のくせに
〝利〟というものを
学んでおらぬ
〝利〟は人を動かす
源じゃ
人と接するのが
仕事なのに
その人の奥底に
潜むものが
分かっておらぬ…！
そして
何よりも
国を越えての
商い故
〝国〟というものに
とらわれない
〝国〟というものが
どういうものか
分かっておらぬのじゃ
そのような者に
殿を口説き
落とせるやら…
いや例え
殿を口説き
落とせても
その殿の存在が…
南天の
社稷を守るためには
邪魔になる…!!

和睦だと!?
その話は
するなと
申しただろうが!!
この俺に
竜我に頭を
下げよと
いうのか!!
羅候様
なぜそのように
勝ち負けに
こだわりまするか
戦を勝敗のみで
論ずるのは
過ちでございます
アホウ!
戦には
勝ち負けしか
ないだろうが!?
勝って
敵の地を踏みにじり
敵の血で染まった
我が旗を
その地に立てて
初めて戦は
終わるのだ!
確かに
その戦勝の
名誉は
手に入りましょう

おそれながら
国を取るということは
その地も民も
望むということです
それは
一戦の勝利で
得れるものでは
ございません！
……
何が
言いたいのだ！
五丈は
南天深く侵攻
しましたが
それは地を得ただけで
民を得てるとは
思えません
また西兌に
都を奪われ
自らの地を失い
また遠征軍の
補給は細くなり
これは五丈国内の
活力の低下でもあり
すなわち民をも
失ったと
いえましょう
最早
五丈軍は
撤退するより
他はなく
これは地も民も
得られない
五丈の敗北となり
転じて羅候様の
勝利となります

ふうくくん
そんな
勝ち方も
あるのか…
これをもって
五丈との和睦を
結び
再び地と民を得
名君としての
誉を手にお入れに
なるのです
勝って
和睦を申し入れる
のです
何ら恥入ることは
ございません！
そこで
力を貯えて
五丈を討つと
いうわけだな！
そうだろう!?
それは
羅候様
竜王様
どちらかに天命が
帰すときのこと
私が
とやかく
いうことでは
ございません…！
ふ…
正直なやつだ
気に入った！
いいだろう！
そういう
和睦なら
考えてもよい！

はは―っ
ありがたき
幸せ！
これでいい
とにかくまずは
矛を収めさせる
ことだ…
後は
この和睦を永続させる
策を講じればいい…
麟の話によると
龍緒様も
動いているとのこと
五丈の方は
お任せ
しよう…
龍緒様
船の用意が
できました

どちらへ
参られます？
知れたこと
五丈の本陣じゃ
五丈の本陣!?
では竜王の許に
参られるので
ございますか！
ふふ
そうではない
竜王はわしの
話などに
耳を貸すまい
だが
竜王を動かせる
男が一人おろう

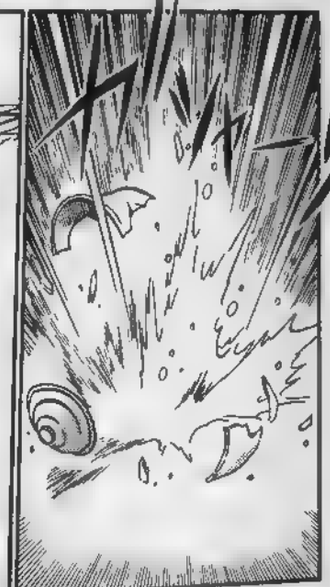
龍緒だと？
何だ？
夜分
申し訳ありませぬ
龍緒と名乗られる方が
内々にお会いしたいと…
申し上げます
……

恐れ入ります
まずは
開戦以来の
六紋海・北京沖の
会戦での勝利
まことにお見事で
ござった
して…
ご用件を
伺いましょう
ささっ
こちらへ
それがし
五丈丞相
大覚昼師真
御老君の名は
よく存じあげて
おりまする
お初に
お目にかかりまする
龍緒でござる
ギィ…

師真殿においては
よく竜王を助け
良策を講じ
戦のたびに勝ちを得られ
すでに南天の大半を
降された
大慶の至りで
ございます
なに
全ては竜王様の
恩徳と武運が
あってのこと
それがしの
手柄では
ござらぬ
いやいや
このまま
五丈が天下を
取ったならば
師真殿の功績は
誰をも圧する
大きさでござる
ご謙遜
なさられるな
その功績と
威光を称え
それがしの封地を
隠遁の地として
差し上げたく
参った所存
どうか
お受け取り
くだされ
龍緒殿！
それは
何の冗談か！
何故この私が
そなたより隠遁の地を
授からなければ
ならんのだ
これはしたり…
深謀遠慮の
師真殿のこと…
多言は
要しますまい
ふ…
わからんな…
何のことだ？
そなた
自らの手で葬り
なされた
骸延のことを
お忘れでは
あるまいな
骸羅三兄弟
謀士骸延
反間の計にはまり
兄骸羅に疑われ
獄に繋がれる
外から見ておりますと
楽屋の裏も
よく見えます
あれは
見事でござった

師真殿は
その策を竜王に
献じた時
この話をしませんでしたかな？
「狡兎死して走狗煮られ
高鳥尽きて良弓蔵れ
敵国破れて謀臣亡ぶ」と…

帰られよ…！



わかりました…
またお会い
することも
ありましょう
だが最後に一つ
申し残しましょう

そなた
あまりにも
竜王に近い…！
君臣の間柄を
越えた仲とは
聞こえはよいが…
それは非常時で
あるからこそ
許されることじゃ
近すぎれば
近いほど
また疎まれ易い

天下統一に至る
そなたの功績…
国半分を与えても
まだ足りぬじゃろう
竜王は
労苦を共にできても
楽しみを人に分ける
人柄かのう…

よく
お考えなされ
ふん…！
走狗煮られか…
くだらん！
遠い将来のため
洞窟のこうもりに
成り下がれって
いうのか？
老人の
発想だな…！

ゴゴゴゴゴ
龍緒様
もうお帰りですか？
ここには
もう用はない
種はまいて
おいたからのう
次は竜王が
わしを招くことになる
それまで
待つのじゃ
それより
おぬしら
五丈の陣中を
よく見て回ったか？
はい
つぶさに…！
さすがは本陣
槍は研ぎすまされ
兵士の表情は
精悍の中にも
余裕さえ
見えまする

銀河戦国群雄伝

ライ

軍船も
整備が行き届き
まこと強兵の
軍勢でございます
恐らく
南天軍など
鎧袖一触であろう
そして
五丈による天下統一じゃ
時は
満ちたり…！
この時機を
待っておったのじゃ！
あとは
あの大覚屋の
心の動きだけじゃ

「銀河戦国群雄伝ライ」26巻
「兄弟対決！そして…」

Dengeki Comics

銀河戦国群雄伝ライ㉕

2001年2月25日　初版発行

著者　真鍋譲治

発行者　佐藤辰男

発行所　株式会社メディアワークス　〒101-8305 東京都千代田区神田駿河台1-8 東京YWCA会館 電話03-5281-5214(編集)

発売元　株式会社角川書店　〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3 電話03-3238-8605(営業)

装丁　朝倉哲也+design CREST

印刷・製本　共同印刷株式会社

©JOJI MANABE 2001

R本書の全部または一部を無断で複写(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

初出／月刊電撃コミックガオ！ 2000年8月号～12月号(メディアワークス刊)

ISBN4-8402-1769-6 C0979